雅俗叢書五

目次

同宗の逆乱録
宮こと推古　松の浜
近衛霊山公の死
桜井駿の酒狂

特別
14
1919
169

176446

○金の事と考候の書いと欲う一面ある
書信を山海風に都以修「弟」の四字も書い
てあるゝ、そゝ〳〵出来てそゝう、こんを候う
十九年の時御状拝受も来る金書
あるを有しに付て紀念として書つけの
ひそゝう、候と逝言の間物もそゝ北甚
の現状を語る事ともあるゝと考へ候
らゝる其の様子を得るに、私ゝ初
刊の行方をそゝと、候う北海道を

38- 8968

（大祭日の外年中無休刊）

れはならない。處で、其大和本草の土卷、松の條を見ると、勢頭第一に『まつ』と云ふ語意が解釋されてある

まつはたもつの意上略なり、もとまと通ず、久く壽をたもつ木なり。史記龜策傳に松柏爲百木長而守門閭。

少々とつけらしく聞こゆでもないが、先生の言であるから、全く豪强附會でもあるまい。壽を保つといふ譯でもあらうか、誰に聞いても、松は不祥の樹とは言はない、正月の門飾から始めて、頗る御目出度がられる樹である。

昔秦の始皇帝が泰山に登り、風雨に逢つて松樹の下に憩ひ、これに贈るに大夫の官を以てしたと云ふ事は人のよく知る處で、後世松を以て、冥加の樹だと羨んで居る。然るに益軒先生は此に就て『秦皇は惡王なれば、松の爲めに榮となすに足らず、却て辱とすべし』と眞面目に論ぜられてある、理

何どかの孫、六孫王經基の何々、武藏の國の住人私の黨の旗頭、と法性寺の入道より長い冠をつけて、そこで熊谷の次郎丹治直實と本名を名乘る樣に、まつ『くろまつ』も唯『くろまつ』では濟まなくて、凡そ右の如き系圖が入る。此分類の方式は諸大家の間に多少の差異（多くは名稱の上）はあるが、これは標據を以て計さるゝ齋田博士の大日本普通植物誌によつたのである。尙ほ全書によつて『くろまつ』が此の位置を占むるに至るまでの順序を一言して見やう。

植物の中には花の咲かないしたやわらびもあるが、此の『くろまつ』は春の終りに花がさく、だから隱花植物でなくて、顯花植物に屬して居る位は言ふまでもないが、次にぬて居るものが裸出して居る、梅や梨は腋かそふな子房につゝまれ、時には毛布までかさるもの）が裸子植物と區別して、裸子植物と云ふ名を

第二種郵便物認可　明治廿七年一月一日　金曜日　（大祭日休刊）　第八千五十三號　（一）

新潟新聞

新潟新聞

迎歲の辭

鳥更匆々、歲律茲に新に、年華の去つて復來るを迎ふ。春日の和煦なし、梅花の芳芬なし、明治四年始めて大陽曆に依るの制を定めてより、一年を去歲と今年とに分つに殘むること五年の内に春の來ることなく、稱むで一期來復といふべからずと雖も、唯新年と聞くのみにして、人情坐ろに風物の改まれるを覺ふ。

新に浴する者は衣を振ひ、新に泳する者は冠を彈くといふ。余翌筆硯を新にして新歲を迎ふるに際しては、顧ち多少の所期ありと雖も、其意の如くならざる者毎年の八九。唯昊天の祝鶏我皇の上にあり、吾人國民は此歲に於て、去年をして不愉快ならしめし原因を芟除する事を得むか。去年を不愉快ならしめしもの、財界の不景氣あり、兼議院の解散あり、されど皆共に外交の問題に於て、其大に振出し、其外交や、其大に振るまいと思ふ。

ふ事亦期月の間を出でざる可けれども、國二千五百年、幸に明治卅七年は、前古未だ曾つてあらざるの愉快なる年たるを得へし。

惡魔、天行健なり、年の愉快なるも可、愉快ならざるも亦可、吾人は唯自ら彊めて息まざらむのみ。人事の意の如くなると、ならざると、我に於て果竟何かあらむ。

陶庵閑語

侯爵　西園寺公望（談）

政友會總裁たる、西園寺侯其人である、侯は社會階級の上には尤も高き家門の出たるに拘はらず懷抱の氣質は却て之を邪魔者視し、少年の頃から平民主義を唱へて當時世間から狂人扱を受けた位であつた、記者が訪問した時は、愛媛縣前代議士重岡重五郎渡邊修の兩氏と對坐時局問題に就て談話中であつたが、交際に巧みな侯は話頭を一轉して直ちに記者に向つて語られた、左に記するのは即ち其梗概である（東京一記者）

ナニ、自分に維新時代の懷舊談を？イヤどう為方々からッゥいふ依頼を受るのだが、自分は凡て御斷はりを致して居る、尤も維新前後に方つて、自分も別に國事に關係せんでもなかつた、が併しホンの少年の頃で、アノ當時の事といふものは、自分でも記憶して居るやうなやうでもあり、又居らぬやうでもあるといふ始末で、サッパリ纏りが附かないから、どうも御話する譯には參らぬと思ふ。

越後口の戰爭ですか……アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、丹波、因幡、伯耆等を經て、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

で、會津にも戰ひ、長岡にも戰つたけれども、會津は越後府の知事に任命されたから、アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

で、會津にも戰ひ、長岡にも戰つたけれども、會津は越後府の知事に任命されたから、アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

途に新潟へは廻らなかつたが、維新後自分は越後府の知事に任命されたから、アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

就任して居つたなら、勿論新潟も充分知ることが出來たらうが、自分は辭退して官を捨て、東京に歸つて象て希望の洋行を決行したので、途に今日迄新潟といふ土地を知らない、何れ機を見て漫遊したいと思ふて居るが、どうも其機會が得られぬ。

越後に就ての懷舊談と申せば、マッ此位のものであるが……話せばモウ一つ御話しても宜しいのは、ヤハリ自分が越後口へ出て向いて居た時の事で、或日前原一誠が類色を變へてヤッて來て、一大事起れりと叫んだから、何だと聞くと榎木鐘次郎が軍艦を奪つて箱館へ逃げたといふのだ、其時吾輩は極本にも不似合に愚なる事をしたのだ、奪つて箱館へ逃げたといふのは、何とも目出度い。

在京新潟縣人　春のうはさ

在京　とうとう　はくろ

◎前嶋密男氏

前島の老人も愈々明けて古稀となられたが、それにしては鍾馗なのだ。毎年冬は例のリューマチで湯治に出られるのが常で坂と江戸との聯絡を絶つて紀州藩を傳り、從へて大に事を天下に爲すものを、悠々北海道へ逃げ込んだのは、恰も自殺するやうなものぢや、であるから國家の一大事でも何でもない、少しも憂ふるに足らぬと言つたことがある、豪傑前原の如きものでも時とするとウロタへることもあるが、されば申して吾輩の如きものが、其豪傑に辯釋する時もあるから可笑しい。

之は越後の戰爭が濟んでから後の事だが、今でも思ひ出す事であるから序に話すが、會津城の落ちた後へ行つて見た處、死骸が岸山庭の砂に埋めてある、地下の家では井戸替をすると屍骸が上つた、又邊ると又上がる、終に五六の死体が水脈れになつて上るといふ有樣で、實に酸鼻の極であつた。

戸水が臭いといふて騒いで居る、邊に井戸

陶庵閑語

侯爵　西園寺公望（談）

政友會總裁たる、西園寺侯其人である、侯は社會階級の上には尤も高き家門の出たるに拘はらず懷抱の氣質は却て之を邪魔者視し、少年の頃から平民主義を唱へて當時世間から狂人扱を受けた位であつた、記者が訪問した時は、愛媛縣前代議士重岡重五郎渡邊修の兩氏と對坐時局問題に就て談話中であつたが、交際に巧みな侯は話頭を一轉して直ちに記者に向つて語られた、左に記するのは即ち其梗概である（東京一記者）

ナニ、自分に維新時代の懷舊談を？イヤどう為方々からッゥいふ依頼を受るのだが、自分は凡て御斷はりを致して居る、尤も維新前後に方つて、自分も別に國事に關係せんでもなかつた、が併しホンの少年の頃で、アノ當時の事といふものは、自分でも記憶して居るやうなやうでもあり、又居らぬやうでもあるといふ始末で、サッパリ纏りが附かないから、どうも御話する譯には參らぬと思ふ。

越後口の戰爭ですか……アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

で、會津にも戰ひ、長岡にも戰つたけれども、會津は越後府の知事に任命されたから、アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

途に新潟へは廻らなかつたが、維新後自分は越後府の知事に任命されたから、

（第三種郵便物認可）　明治廿七年一月一日　金曜日　（外國電報日刊）新潟新聞（休刊）　第八千五十三號　（一）

新潟新聞

新潟新聞

迎歲の辞

鳥更匂ひ、鶯律茲に新に、年華の去つて復来るを迎ふ。春日の和煦なし、梅花の芳分なし、既治四年始めて太陽暦に依るの制を定めてより、一年を去歳と今年とに分つに過ぎて五年の内に春の來るとなく、稱むで一期來復といふべからずと雖も、唯新年と聞くのみにして、人情坐ろに風物の改まれるを覺ふ。

新に浴する者は衣を振ひ、新に沐する者は冠を彈くといふ。余雖筆硯を新にして新歳を迎ふるに際しては、顧ち多少の所期あり。其意の如くならざる者毎年の八九。唯昊天の祝福我皇の上にあり、吾人國民は此歳に於て、去年をして不愉快ならしめし原因を芟除する事を得むか。去年を不愉快ならしめしもの、財界の不景氣あり、条約改正の解散あり、されど皆共に外交の関宜に出でたるに過ぎず、其外交や、其大に振ふまいと思ふ事亦期月の間を出でざる可けれども。開國二千五百年、幸に明治廿七年は、前古未だ曾つてあらざるの愉快なる年たるを得へし。

悪莫、天行健なり、年の愉快なるも可、愉快ならざるも亦可、吾人は唯自ら彊めて息まざらむのみ。人事の意の如くなると、ならざると、我に於て畢竟何かあらむ。

陶庵閑語

侯爵　西園寺公望（談）

殿合の中央なるニコライ教會と、背中合せに一搆の西洋館がある、瓦葺の大門を潜れば松柏の蔚蒼たる所に出る、一面に白砂を敷詰めて、誰の目にも大華族の邸宅とは受取られる、突當りの取次の玄關で、一寸ベルを押すと十六七年の一少年が出て來る、刺を通じて主人に面謁を乞ふと、暫くわつてこちらへと案内するので、少年に隨ふて階段を昇りて詰めると、十疊餘りの應接所がある、南窓の下に暖炉を設け、其周圍には五六の椅子と一個の物置臺が置かれ、正面の机の上には希臘古代の人物畫が掲げられ、別に美を盡した裝飾は無いが、何となく清麗たるものである、そして其側に粛然として控へて居るのは、當家の主人前樞密院議長今政友會總裁たる、西園寺侯其人である、侯は社會階級の上には尤も高き家門の出たるに拘はらず懐抱洒落の氣質は却て之を邪魔者視し、少年の頃から平民主義を唱へて當時世間から騒がれた位であつた、記者が訪問した時は、愛媛縣前代議士重岡薫五郎渡邊修の両氏と驅りに時局問題に就て談話中であつたが、交際に巧みな侯は話頭を一轉して直ちに記者に向つて語られた、左に記するのは即ち其梗概である（東京一記者）

ナニ、自分に維新時代の樣な話を？イヤどうも方々からッいふ依頼を受るのだが、自分は凡て御斷はりを致して居る、尤も維新前後に方つて、自分も聊か國事に關係せんでもなかつた、が併しホンの少年の頃で自分も記憶して居るやうでもあり、又居らぬやうでもあるといふ始末で、サッパリ纏り附かないから、どうも御話しする譯には參らぬ。

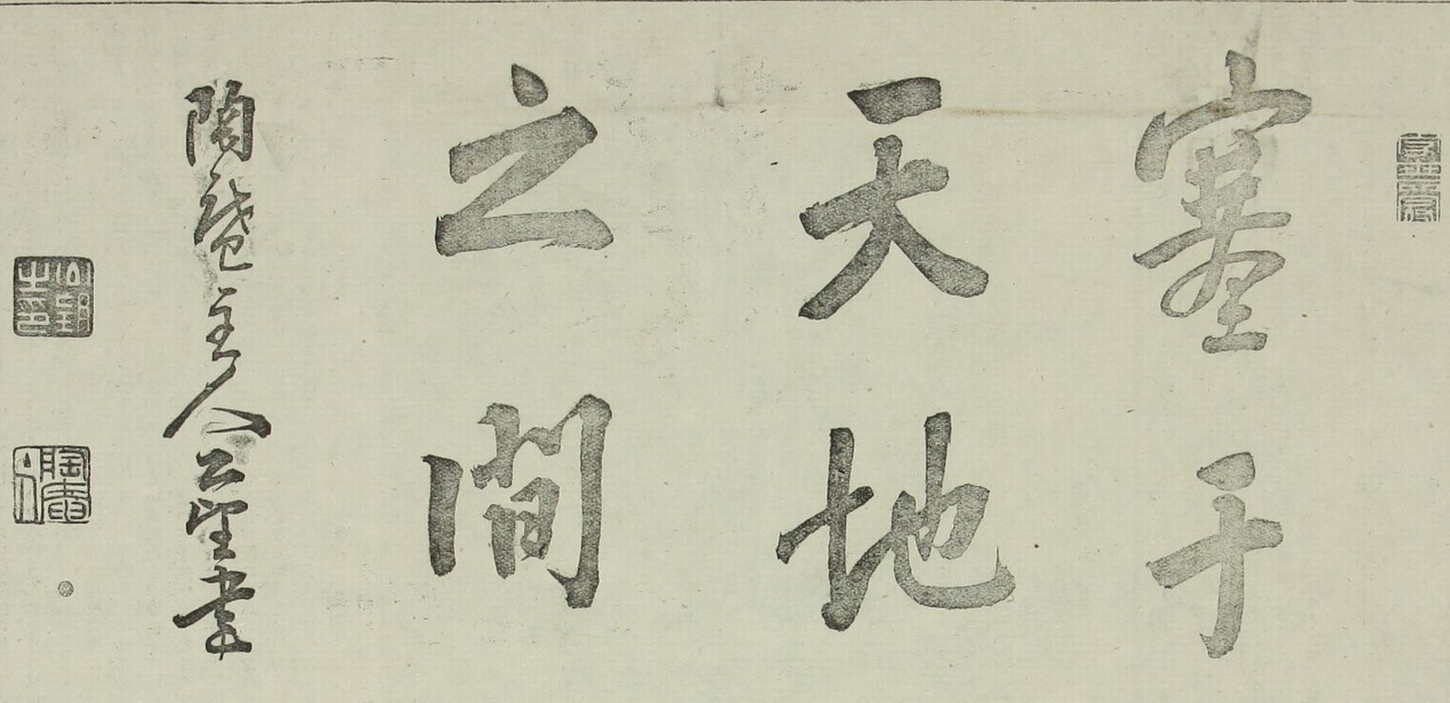
越後口の戰爭ですか……アノ時は丁度吾輩が十九の年で、尚更よく覺えて居らぬが、伏見鳥羽の役が起ると、自分は征討總督として、丹波、因幡、伯耆等を經て、三月頃大坂に歸り、主上に拜謁して復命をして、それから何でも五月であつたと記憶するが越後方面に進發した、其頃自分は會津征討越後口總督として諸軍を率ねて居たのであつたが其後仁和寺宮樣が御出陣になり、自分は大參謀といふ役で軍務を執るといふことになつた。

戰ひ、長岡にも戰つたけれども、會津にも戰ひ、維新後自分は越後府の知事に任命されたから、アノ時遂に新潟へは廻らなかつたが、勿論新潟も充分知る樣に新潟開の初刊を祝するといふ微意で、何か一つマッチ字でも書いて上げる事と致さう。（下に掲ぐるものは是れなり）

就任して居たなら、自分は辭退して官を捨てて、東京に歸つて兼て希望の洋行を決行することが出來たらうが、アノ當時の事とは云へ、ツマリ自分の不自由を忍ばれない、蠣殼の稽古をするが如しの稽古をするが如しの稽古をするが如しの

宰子天地之間

陶庵子八十五生書



あるのに、今年はどうしたものか通さに歳前に切迫せる今日、どうして扨目があらう。を取られて朝鮮三界まで除髪毛をやられた書夜の運動、殊に軍用メリヤスの賣込で、のには、有韓の壯士連り舌を擦たといふこと戰爭の始まらない前から、大分せしめて獨とである。韓山の風雲漸く動き始めて、京りホク〳〵であるといふこと。定めてロイ釜鉄道速成の必要から翁の千里渡韓を促す歳を取つたといつて喜んで居ることであらことになつたと聞くに至ては、若い者はとう。

◎益田孝氏

近頃は外交政略の餐慢に除程業を煮やして居るといふことだ。日本一の貿易業を統轄して居る氏としてはさもあらう。いづれ事局の孰れかに解決せらるゝを待て大活動を始めるといふことだが、三井を代表しての大飛躍定めし本年の見物であらう。

◎高田慎藏氏

氏の宅には一つの酒倉がある、之は賣るのでなくて飲むのだそうだ。中へはいつて見ると東西歐米の有らゆる酒が殘らず此倉の中に貯藏されてある。そして此倉は決して他人の獨りに出入するを許さないで、倉の鍵はいつも自分に持て、珍客があると、主人自から先頭に立て此倉の中へ案内し、如何なる酒でも客の注文通りなのを取出して御馳走するのである。正月には此倉の中が一番賑かなそうである。

◎石黒忠悳男

此人にして是迄電話を持たなかつたといふのが一つの不思議であるが、昨年始めて電話が出來て見ると、サー大變な騒ぎだ。何處でも電話の悪りといへば、書生か小間使か、さなくば下女の取次といふのが普通であるのに、翁の家ではチリチリンと音がすると必ず主人自から飛んで出る。主人が不在であれば必ず令夫人が飛んで出て、『私は何の家だが男爵は御在宅か』などゝ、書生が何かに話をする積で横柄にやつて居ると、『男爵は此處に居るが、何の用だ』と不意打を喰つて狼狽する者が滅分多い。或時も一寸有名な教育家が『男爵は御宅か』と聞くと、優さしい女の聲で『主人は只今留守でムリますが何か御用事なら承つて置きましよう』との返答であつたので『イヤ私前なぞには分らない、與様に一寸そういつて貰ひたい』といふと、以前の優しい聲が『私は石黒の家内ですが……』と名乗りを擧げたので、教育家は電話の前で愛わず頭を掻いて恐縮したとの話がある。新年は此電話でイヤメられる奴が滅分多いとであらう。

◎市島謙吉氏

病後大好物の酒と煙草を嚴禁してから、肉は肥わる、目方は増す、血色は好くなる、でつぷりと肥わた處は病前に比較してたしかに二倍の健康體に進まれたといふ事だ、昨今は早稲田大學の圖書館の擴張に餘念なく、之をして遠からず日本一の圖書館たらしむるの大計畫であるそうな。『どうですそんな立派なカラダになつて脾肉の歎はありませぬか』といふと『英雄回首則神仙サ』

◎建部遯吾氏

博士の氣宇閑臣の心膽を寒からしめて以來谷子佳婿ありとの噂專ら世に高しとの事である。近來大學書生の氣骨乏しきを慨し、金曜日には自宅に茶話會を開て學生を相手に光畑萬丈だといふとだ、優儁の睦まときは博士中第一、先頃愛兒を擧げられたのは何よりも目出度い。

◎中村進午氏

氏は亦慷慨博士の一人である。近來は益々學問に熱中せられて、浮世の事には餘り關係せられない、是も先頃愛兒を擧げられて、是が朝夕唯一の慰みであるといふ事である。

◎大倉喜八郎氏

戰鬪力は相變らず盛である。日露戰爭の眼

あるのに、今年はどうしたものか通さに歳前に切迫せる今日、どうして扨目があらう。を取られて朝鮮三界まで除髪毛をやられた書夜の運動、殊に軍用メリヤスの賣込で、のには、有韓の壯士連り舌を擦たといふこと戰爭の始まらない前から、大分せしめて獨とである。韓山の風雲漸く動き始めて、京りホク〳〵であるといふこと。定めてロイ釜鉄道速成の必要から翁の千里渡韓を促す歳を取つたといつて喜んで居ることであらことになつたと聞くに至ては、若い者はとう。

◎石黒忠悳男

此人にして是迄電話を持たなかつたといふのが一つの不思議であるが、昨年始めて電話が出來て見ると、サー大變な騒ぎだ。何處でも電話の悪りといへば、書生か小間使か、さなくば下女の取次といふのが普通であるのに、翁の家ではチリチリンと音がすると必ず主人自から飛んで出る。主人が不在であれば必ず令夫人が飛んで出て、『私は何の家だが男爵は御在宅か』などゝ、書生が何かに話をする積で横柄にやつて居ると、『男爵は此處に居るが、何の用だ』と不意打を喰つて狼狽する者が滅分多い。或時も一寸有名な教育家が『男爵は御宅か』と聞くと、優さしい女の聲で『主人は只今留守でムリますが何か御用事なら承つて置きましよう』との返答であつたので『イヤ私前なぞには分らない、與様に一寸そういつて貰ひたい』といふと、以前の優しい聲が『私は石黒の家内ですが……』と名乗りを擧げたので、教育家は電話の前で愛わず頭を掻いて恐縮したとの話がある。新年は此電話でイヤメられる奴が滅分多いとであらう。

◎市島謙吉氏

病後大好物の酒と煙草を嚴禁してから、肉は肥わる、目方は増す、血色は好くなる、でつぷりと肥わた處は病前に比較してたしかに二倍の健康體に進まれたといふ事だ、昨今は早稲田大學の圖書館の擴張に餘念なく、之をして遠からず日本一の圖書館たらしむるの大計畫であるそうな。『どうですそんな立派なカラダになつて脾肉の歎はありませぬか』といふと『英雄回首則神仙サ』

◎建部遯吾氏

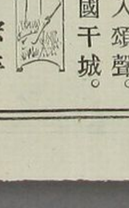
博士の氣宇閑臣の心膽を寒からしめて以來谷子佳婿ありとの噂專ら世に高しとの事である。近來大學書生の氣骨乏しきを慨し、金曜日には自宅に茶話會を開て學生を相手に光畑萬丈だといふとだ、優儁の睦まときは博士中第一、先頃愛兒を擧げられたのは何よりも目出度い。

◎中村進午氏

氏は亦慷慨博士の一人である。近來は益々學問に熱中せられて、浮世の事には餘り關係せられない、是も先頃愛兒を擧げられて、是が朝夕唯一の慰みであるといふ事である。

◎大倉喜八郎氏

戰鬪力は相變らず盛である。日露戰爭の眼



巖上松十韻

冀川　岩溪　晉

維石巖巖上。蒼松蔭大瀛。
丈人欽節勁。君子愛心貞。
常冒氷霜氣。長留日月精。
青苔聞鶴啄。老茯見新耕。
秦世輕封爵。宸題荷寵榮。
唯知鍾秀物。獨占後凋名。
幹聳蟠根伏。崖危偃蓋撑。
長風千里到。萬竅一時鳴。
春意回生色。鶯歌入頌聲。
棟梁稱此臾。誰是國干城。

巖上松　原宏平

いはかねのすのみどりも梢までつゝきて見ゆる松の色かな
そは立てゐる巖の上のひとつ松あな面白の枝のさかりや

巖上松　神尾肇

君がよの千代のためしと動きなきいはほの上におふるまつ哉
吹すさふ浦の汐風あらくとも枝根の松の色はかはらし

新年祝

ゆたかなる年の始のようこひは柳もひなもかはらさりけり
はきかはす今日の吉言は年ごとにくりかへしてもめてたかりけり

松のこと

只『まつ』も妙でなし『松の記』も可笑しい『松のはなし』松の葉がない抔は殊に不祥であるデ何がなし『松のこと』

貝原益軒先生は、まづ我邦に於て最も古い植物學者と云ふてよからふ。該博なる先生の頭腦は、餘力を以て寛文十二年（西暦一六七二）に和名抄本草綱目を著はし、次いで寶永六年（西暦一七〇九）に大和本草を出板された。これ等は何れも現今云ふ樣な嚴密なる意味に於ける植物學の書籍ではないけれ共、とにかく我邦の植物學界に於けるふるき著書として、我々は注意を拂はなければならない。處で、其大和本草の土卷、松の條を見ると、劈頭第一に『まつ』と云ふ語意が解釋されてある

まつはたもつの意上略なり、もとまと通ず、久く壽をたもつ木なり。史記龜策傳に松柏爲百木長而守門閭。

少々こじつけらしく聞えぬでもないが、先生の言であるから、全く憑據會でもあるまい。壽を保つといふ譯でもあらうか、誰に聞いても、松は不祥の樹とは言はない、正月の門飾から始めて、頗る御目出度がられる樹である。

昔秦の始皇帝が泰山に登り、風雨に逢つて松樹の下に憩ひ、これに贈るに大夫の官を以てしたと云ふ事は人のよく知る處で、後世松を以て、寒加の樹だと羨んで居る。然るに益軒先生は此に就て『秦皇は惡王なれば、松の爲めに榮となすに足らず、却て辱とすべし』と眞面目に論ぜられてある、珊瑚を陳て見れば至極入だから、松も先生にかけてはたゞまらぬとこぼして居るだらう。

Aか如何した運のまはり合せか、太年はありがたくも新年の御歌題となり、上は因ある竹の園生のやむことなき方々を始め奉り下はその木の端とだに思はれぬ天さがる鄙の賤の男賤の女にまで、御國振り、幾千代かけて色替へぬその操をうたはれる事になつたから、松もまつ以て栄出度いと喜ぶであらうし、益軒先生亦地下にあつて松の爲めに祝して居られるであらう。

さてさらは、木年の御題になつた『嚴上の松』は果して何松であらうか。松の種類も隨分多いそうであるから一概にはいへないが、嚴の上の松といふと、どうも『くろまつ』を思ひ出す。『くろまつ』は一番男らしい松、松の中での松らしい松、最もキツイ松、強い松、如何なる土地にもよく生長するから、又極めて普通なる松である。嚴上の松は多分此であらう。又此松でなければ嚴との配合も面白くない。御題の松は只『くろまつ』に違ひない。

デ、以下、少しく此『くろまつ』に就て御話しやうと思ふ。

▲名稱及び分類上の位置

『くろまつ』とは勿論和名で、全國に通じて用ゐられる普通『まつ』と云ふ時には多くこれをさす、或は『をまつ』とも云ふ。漢名は黑松。學名は Pinus Thunbergii, Parl で分類上の位置は

顯花植物
裸子植物
松柏植物
松柏科
まつ屬
くろまつ

である通り、まつかさと云ふ球花は、あの鱗片一つ宛が一つの花をなして居る、多くの花の集りてそして果實は木質である。この點が他のいてふや、かやとは差のある最も現著なる點である。

いてふやかやとまつやすぎの違ふて居る點は分つたとして、其のまつとすぎとは全体何處が何樣違ふか。コンナ事を眞面目に問ふと、小學校の小供でも笑ふて早速答へるであらう、イヤ小學校の小供なら笑ふて早速答へるであらうが、學者となるものが中々面倒で、其違ふなら違ふ點を擧げるまでには容易の事でない。先づまつとすぎとの新枝を取つてよく見なければならぬ。よく此を見ると、すぎは何處から何處までも、まつは松としてそれで分つたとして、又まつの中にも、大体に於て五葉が一折から生て居るのと、二葉宛生て居るのとの二つに分れる。前者に屬して居るものは、ひめまつ、はひまつ、てうせんまつはよいが、女や坊さんにをまつは少し合はないではないか。常磐岡や湯屋やにをまつが生へれば、高等女學校の裏にはめまつか姫小松でも、中學林の傍には常葉松が世を過れたといふ處から、赤松子に因む、おかまつのめまつでも生へそうなものだがそう行かぬのは大々不思議である。乍併、又思へば、中學林が既に廢止されたのは、其所位地の不適當なるが爲めとも見ねばならぬ。高等女學校の裏に、天日に燒けた磯のやうな、色くろ〳〵のをまつが生へて居るのは、

嚴上の松　鈴木華邨

獨り其當を欠いて居るのは、寧ろ其當を欠いて居るのであるが、獨り其當を欠いて居るのは、高等女學校の裏や、曹洞宗の中學林のある處に、又等しくをまつが生へて居る事であるが、勇壯にして男らしい學生の居る處のをまつは、ひめまつ、はひまつ、てうせんまつはよいが、女や坊さんにをまつは少し合はないではないか。常磐岡や湯屋やにをまつが生へれば、高等女學校の裏にはめまつか姫小松でも、中學林の傍には常葉松が世を過れたといふ處から、赤松子に因む、おかまつのめまつでも生へそうなものだがそう行かぬのは大々不思議である。乍併、又思へば、中學林が既に廢止されたのは、其所位地の不適當なるが爲めとも見ねばならぬ。高等女學校の裏に、天日に燒けた磯のやうな、色くろ〳〵のをまつが生へて居るのは、

新年

みゆき會

登坂　北嶺

此世みな今朝は我等が領として酒と共にもうたを强ひはや
消からん今年の幸か初夢に詩の眞珠を拾ふとぞ見し

丸角　蒲城

彩雲にこの身乘せられ空高う神に召されし今朝の初夢
紅さして屠蘇にたゆたふ幼妻しはしの笑みを詩に與ずる
あなかしこ日の御帝地姫の御神を乘きて幸に入る今日

加藤　野茨

屠蘇三杯微醉の膝に柱子いだき妻と昔の戀もの語る
さりげなう祝歌つくる里居の我二十歳の理想胸にきざみぬ
煩悩、憂苦その折〳〵の去年の反古けさ焚き拾て、新年迎ふ

羽田　叢雲

新しき光明此世に嚴かやかゝ合掌に永久の幸得む
天の窓の古き根はかろされて彩雲金扉けさひらかれぬ

はつ子

花瓶も祝もわれを初汲のこの若水はまづ紅皿へ
とゝのはぬその譜も春と酌しまゞ青子が祝歌琴に彈く今日

若杉　狹霧

遠山の雪に輝く初日影希望ある世の幸思はしむ

里川　桃作

かたふけし屠蘇のいふきに詩ぞ賜るかくて無限に幸おれとこそ

山木　胡蝶

歌や詩や理想はそはでいたづらに屠蘇くむけさをひとりわびぬる

吉田　一水

瑞瑞島の新粧か瓊瑤の五百てる玉か初日彩雲

松岡　日蓮

嵩神の小さしと裂きし歌の綵や初日と凝りて開世を照らす

須藤　鮭川

春の神は今朝を始めの出御ぞ大天地は彩雲繞ぐる
紅の鶴をいづる初日に水映ゐてあした舟江の人玉の如き
戀成りてふたり笑みある梅の宿屠蘇の香滿ちて與新しき

小金　花作

歡喜を地に湧かしめて初日けさ光明に包む大大和國
綉揚の雲に映ゐにし初陽日記先づ祝女が讃歌に染めむ
立つ年の御殿出づる大神の衣のさやぎを朝風に聞く
膝に遣ふちさき一人の瞳に照りて初日吾詩の靈こめたまへ
屠蘇過ぎて此世聚者が息に稽かれ身は唯瑞瑞と凝るらむ心地

妹である。したならば此の兄と妹はどこまでも、そてつは樹でまわう、そてつから區別して、松柏植物の中には松柏科の一科丈けさいない、だが此の『くろまつ』は春の終りに花が咲くやうに、これに贈るに大夫の官を以てしたと云ふ事は人のよく知る處で、後世松を以て、寒加の樹だと羨んで居る。然るに益軒先生は此に就て『秦皇は惡王なれば、松の爲めに榮となすに足らず、却て辱とすべし』と眞面目に論ぜられてある、珊瑚を陳て見れば至極入だから、松も先生にかけてはたゞまらぬとこぼして居るだらう。

Aか如何した運のまはり合せか、太年はありがたくも新年の御歌題となり、上は因ある竹の園生のやむことなき方々を始め奉り下はその木の端とだに思はれぬ天さがる鄙の賤の男賤の女にまで、御國振り、幾千代かけて色替へぬその操をうたはれる事になつたから、松もまつ以て栄出度いと喜ぶであらうし、益軒先生亦地下にあつて松の爲めに祝して居られるであらう。

さてさらは、木年の御題になつた『嚴上の松』は果して何松であらうか。松の種類も隨分多いそうであるから一概にはいへないが、嚴の上の松といふと、どうも『くろまつ』を思ひ出す。『くろまつ』は一番男らしい松、松の中での松らしい松、最もキツイ松、強い松、如何なる土地にもよく生長するから、又極めて普通なる松である。嚴上の松は多分此であらう。又此松でなければ

日本帝國民の眼、となるべき式部達は、當に此まつの樣に雄々しく振然はねばならぬと云ふ、天公の教訓かも知れないテ。

話が岐路にそれて長くなつた、次には外部と內部との形態とを簡短に述べ、序に生殖の事でも話して見やう（つゞく）（新潟師範、米山米一郎）

（第三種郵便物認可）　明治卅七年一月一日　新潟新聞　（大祭日の外年中無休刊）　第八千五十三號　（二）

松のこと

只『まつ』も妙でなし『松の記』も可笑しい『松のはなし』松の葉がない抔は殊に不祥であるデ何がなし『松のこと』貝原益軒先生は、まづ我邦に於て最も古い植物學者と云ふてよからふ。該博なる先生の頭腦は、餘力を以て寛文十二年（西暦一六七二）に和名抄本草綱目を著はし、次いで寶永六年（西暦一七〇九）に大和本草を出板された。これ等は何れも現今云ふ樣な嚴密なる意味に於ける植物學の書籍ではないけれ共、とにかく我邦の植物學界に於けるふるき著書として、我々は注意を拂はなければならない。處で、其大和本草の土宿、松の條を見ると、劈頭第一に『まつ』と云ふ語意が解釋されてある

まつはたもつの意上略なり、もとまと通ず、久く壽をたもつ木なり。史記龜策傳に松柏爲百木長而守門閭。

少々こじつけらしく聞ねぬでもないが、先生の言であるから、全く豪强附會でもあるまい。壽を保つといふ譯でもあらうか、誰に聞いても、松は不祥の樹とは言はない、正月の門飾から始めて、頗る御目出度が

られる樹である。

昔秦の始皇帝が泰山に登り、風雨に逢つて松樹の下に憩ひ、これに贈るに大夫の官を以てしたと云ふ事は人のよく知る處で、後世松を以て、冥加の樹だと美んで居る。然るに益軒先生は此に就て『秦皇は惡王なれば、松の爲めに榮となすに足らず、却て辱とすべし』と眞面目に論ぜられてある、理屈を聞て見れば至極入だから、松も先生にかけてはたゞまらぬとこぼして居るだらう。

扨如何した運のまはり合せか、本年はありがたくも新年の御歌題となり、上は因ある竹の園生のやむことなき方々を始め奉り下はその木の端とだに思はれぬ天さがる鄙の賤の男賤の女にまで、御國振り、幾千代かけて色替へぬその操をうたはれる事になつたから、松もまつ以て芽出度いと喜ぶべしあらうし、益軒先生亦地下にあつて松の爲めに祝して居られるであらう。

さてさらは、本年の御題になつた『嚴上の松』は果して何松であらうか。松の種類は隨分多いそうであるから一概にはいへないが、嚴の上の松といふと、やはり『くろまつ』を思ひ出す。『くろまつ』は一番男らしい松、松の中での松らしい松、最もキツイ松、强い松、如何なる土地にもよく生長するから、又極めて普通なる松である。嚴上の松は多分此であらう。又此松でなければ嚴との配合も面白くない。御題の松は此『くろまつ』に違いないと思ふ。

デ、以下、少し此『くろまつ』に就て御話しやうと思ふ。

▲名稱及び分類上の位置　『くろまつ』とは勿論和名で、全國に通ずて用ゐられる普通『まつ』と云ふ時には多くこれをさす、或は『をまつ』とも云ふ。漢名は黑松、學名は Pinus Thunbergu, Parl で分類上の位置は

顯花植物
裸子植物
松柏植物
松柏科
まつ屬
くろまつ

武士が戰場で名乘りを上げるにも何とかの孫、六孫王經基の何々、武藏の國の住人私の黨の旗頭、と汎性寺の入道より治直實と本名を名乘る樣に、まつ『くろまつ』も『嗚『くろまつ』では濟まなくて、凡そ右の如き系圖が入る。此分類の方式は諸大家の間に多少の差異（多くは名稱の上）はあるが、これは標據を以て計さるゝ蹤田博士の大日本普通植物誌によつたのである。尙は全書によつて『くろまつ』が此の位置を占むるに至るまでの順序を一言して見やう。

植物の中には花の咲かないしたやわらびもあるが、此の『くろまつ』は春の終りに花が咲く顯花植物でなくて、顯花植物中の裸子植物と云ふ名稱をつ

嚴上の松

ける通り、まつかさと云ふ球花は、あの鱗片一つ宛が一つの花をなして居る、多くの花つの中にも、大体に於て五葉が一折かて居るのと、二葉宛生て居るのとに分れる。前者に屬して居るものは、ふまつ、ひめまつ、はひまつ、てうせつ、で後者に屬して居るものはくろまつ、わかまつの二種である。

以上述べ來つた處によつてくろまつは、の植物中間から分れ分れて、此處までは、まだおかまつとは分れることがない。して見ると、此の二者はよほど親と見ねる、人間にしたならば兄弟間柄だ。然り兄弟である。くろまつはをまつ、おかまつは一名めまつ、と云ふ居るから、兄弟も兄弟第一方が此で一

まつは松としてそれで分つたとして、

妹である。したならば此の兄と妹

木の男の子だけはよく生育するので

此をまつが生へて居るは極めて其處

通りをまつは何所となく男子らしく

の皮は赤く、葉はやはらかに自然に

俗歌に岩に松さへ生へるちやないか

にても生長するから、土砂防止林な

主として此くろまつが用ゐられる。

濱一帶にあるのも、此くろまつで、

と男の子は青たぬといふ新潟にも、

決してそふではない、これ等の多數

處で、我帥範學生の居る常磐ヶ岡を

し、中學生の闘屋の浦や商業學校の

此等各屬の間でも、亦果實や葉で區別がさ

枝について居る處を見ると、こゝに小さな

綠色でないものが付いて居る、此は何者だ。

植物學者は此にもやはり葉と云ふ名稱をつ

けて鱗片葉といふ。前にいふた綠色の葉は、

此の鱗形の葉の葉腋から生ひて居るので此

奴は實に一ケの短い枝である。これでまつ

には葉が一樣でないと云ふ事が分つて、始

めてまつは卓然として他屬から區別される

木の男の子は、胚珠の時にはまだないので、胚珠が交

胞した後に生ずるものであるから、や

はり裸子になる）處がまつやすぎは人の知

れ丈け違つて居るかと云ふに、其名の

し、葉も强硬で、これに反してまつは

現はして居る。

にて居るものがあるが『くろまつ』は此等の

殺子植物と區別して、裸子植物と云ふ名を

つける。此の裸子の內にもまつは葉が細裂して居

もつて居る點、そつては葉が細裂して居る、それ

點が、まつ、さはらなどと違つて居る、それ

でまつ、そつつから區別して、松柏植

物と云ふ名がついて居る。此松柏植物の

中には松柏科の一科丈けさいない、だが此

の松柏科は隨分含む處が廣い。東京理科大

學の標品目錄には十八屬挙げてあるが、蹤

田博士はまつをはトめとしてもみ、すき、

さはら、いてふ、かや。このてかしは。な

ぜ十七屬を示されてあるか。

此等各屬の間でも、亦果實や葉で區別がさ

枝について居る處を見ると、こゝに小さな

綠色でないものが付いて居る、此は何者だ。

植物學者は此にもやはり葉と云ふ名稱をつ

けて鱗片葉といふ。前にいふた綠色の葉は、

此の鱗形の葉の葉腋から生ひて居るので此

奴は實に一ケの短い枝である。これでまつ

には葉が一樣でないと云ふ事が分つて、始

めてまつは卓然として他屬から區別される

只一樣の短かい尖つた葉ばかりでみたされ

て居るさはら、このでかしは、もみなども

みな一樣であるがまつはそふはゆかない。

綠色の針の樣な葉が二、三、五本宛一と處

から生ひて居る、此が既に違ふ。それだけ

ならば誰も分るがこれだけではまだ學者は

十分の區別としない。更に其まつの葉の新

枝について居る處を見ると、こゝに小さな

綠色でないものが付いて居る、此は何者だ。

植物學者は此にもやはり葉と云ふ名稱をつ

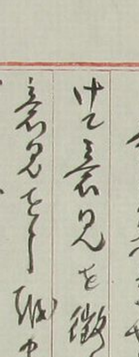
けて鱗片葉といふ。前にいふた綠色の葉は、

此の鱗形の葉の葉腋から生ひて居るので此

奴は實に一ケの短い枝である。これでまつ

には葉が一樣でないと云ふ事が分つて、始

めてまつは卓然として他屬から區別される



松

、あの鱗片、多くの花つの中にも、大体に於て五葉が一折から生る。この點下て居るのと、二葉宛生下て居るのとの二つに分れる。前者に属して居るものはごぬふまつ、ひめまつ、はひまつ、てうせんまつ、で後者に属して居るものはくろまつとあかまつの二種である。

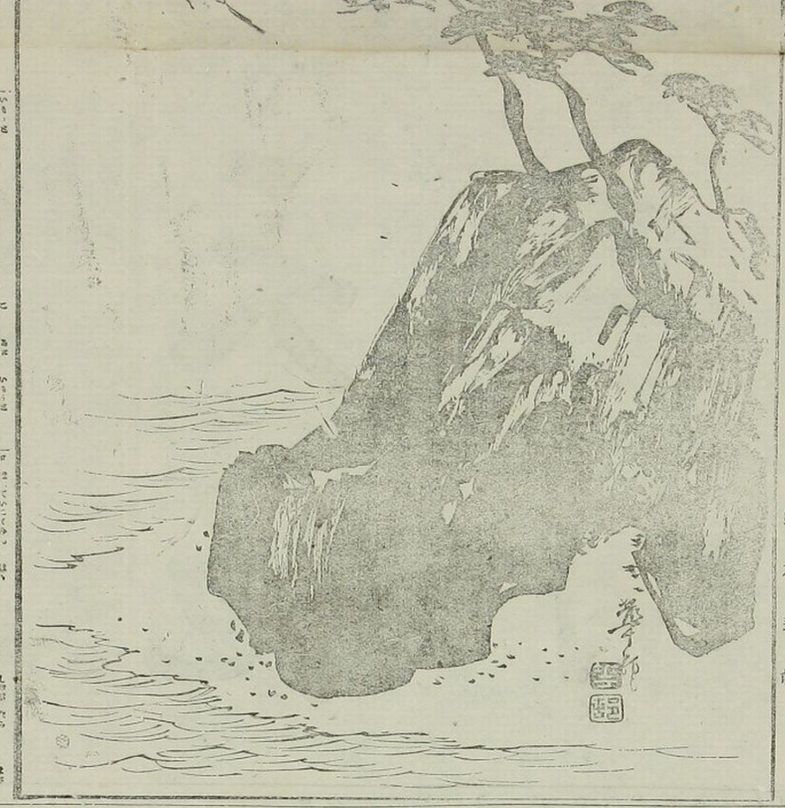
以上述べ來つた處によつてくろまつは多くの植物中間から分れ分れて、此處までは來たが、まだあかまつとは分れることが出來ない。して見ると、此の二者はよほどの近親と見ねる、人間にしたならば兄弟位の間柄だ。然り兄弟である。くろまつは一名めまつ、と云ふてをまつ、あかまつは一名めまつ、と云ふて居るから、兄弟も兄弟第一方が既で一方は

まつは松としてそれで分つたとして、又まつまつ、ひめまつ、はひまつ、てうせんまつまつ、で後者に属して居るものはくろまつとあかまつの二種である。

以上述べ來つた處によつてくろまつは多くの植物中間から分れ分れて、此處までは來たが、まだあかまつとは分れることが出來ない。して見ると、此の二者はよほどの近親と見ねる、人間にしたならば兄弟位の間柄だ。然り兄弟である。くろまつは一名めまつ、と云ふて居るから、兄弟も兄弟第一方が既で一方は

るのであるが、獨り其當を欠いて居るのは高等女學校の裏や、曹洞宗の中學林のある處に、又等しくをまつが生へて居る事である。勇壯にして男らしい學生の居る處のをまつはよいが、女や坊さんにをまつは少し合はないではないか。常磐岡や闘屋やにをまつが生へれば、高等女學校の裏にはめまつか姫小松でも、中學林の傍には落葉松が世を遁れたといふ處から、赤松子に因むあかまつのめまつでも生へそうなものだがそう行かぬのは大々不思議である。乍併、又思へば、中學林が既に廢止されたのは、其所在地の不適當なるが爲とも見ねるし、高等女學校の裏に、天日に燒けた鎧のやうな、色くろくのをまつが生へて居るのは、

鈴木華郎



妹である。したならば此の兄と妹はどう通りをまつは何所となく男子らしく色黒いし、葉も強硬で、これに反してめまつは樹の皮は赤く、葉はやはらかに自然に女性を

日本帝國民の性となるべき式部達は、常に此まつの樣に雄々しく振舞はねばならぬといふ。天公の教訓かも知れない。

話が岐路にそれて長くなつた。水には外部と内部との形態とを簡短に述べ、序に生殖の事でも話して見やう（つゞく）（新潟師範一米山米二郎）

俗歌に岩に松さへ生へるちやないか云々といふ通り、此くろまつは殆ど如何なる土地にでも生長するから、土砂防止林などには主として此くろまつが用ゐられる。新潟の濱一帯にあるのも、此くろまつで、杉の木と男の子は青たぬといふ新潟にも、此松の木の男の子だけはよく生育するのである。處で、我師範學生の居る常磐ケ岡を始めとし、中學生の闘屋の沖や商業學校の南山に、此をまつが生へて居るは極めて其處を得た

新年

みゆき會

登坂　北嶺

此世みな今朝は我等が領として酒と共にうたを強ひばや
濁からん今年の幸か初夢に詩の眞珠を拾ふとぞ見し

横きりし艦は初瀬か駿島かさすや初日子眞紅の浦曲　高橋かほる

をたけびの靈魂の血汐かあけの雲に春は立てぞもうらさわがしき　大江たゞを

金色の八重雲排き初日今朝地の諸衆に春授けます　亀谷彌生

鶏の音に朝寝覚して富士の女神海の初日にみ髪理むる　渡邊　淡舟

新しき希望の光満ち足らひ此世さながら天津神の世　武田　雪麿

聞にして今朝初夢をかたらひし二人が笑よ永久に若かれ　亀谷　彌生

立ちかへる年のはつ宮神さびて春日舞子の消ゆべき紫殿　武田　雪麿

初日うけて大わたづみの紺青に龍女の衣の鱗と映ねぬ　武田　雪麿

屠蘇もくまで父が姿絵床に据ねて胸に『昨日のわれとおぼすな』

十九の春をさはいつまでも幼なからんとはかり今朝の屠蘇酌みかねつ　村山　梅作

初日影希望の春をもたらして今朝二人居の軒を訪ひてし　村山　梅作

春風に屠蘇をふかせて松くゝる君若やぎし戀は古りにし　小川生　別

幸多き新年ほぐと酒くめば扯子が手箱の雛もほゝゑむ　月浪　静男

玉杯にうま酒くみてことほきて今朝天地の平和うたふ　月浪　静男

春の神が乘れし榮光によみがへり歡喜うたふうつくし我が世　佐久間桂花

わか水を汲む手たゆげの里居の姉京、鶯のなまりに笑みぬ　佐久間桂花

そのわした瑞祥の壺に魂をひめし吾初夢に眉の驕りよ　村上　星星

詩の神が鉾さながらの光して初日冥路の闇戸も照らせ　内藤　龍郎

神の乳の香に慕ひよる今朝の春詩にまだ若き幼な子が鼎　石黒　夕雨

歌書きて送りし羽子を人は今朝初日の庭に笑みて見ますか　登坂　柳暗

新しき年を驕りの祝歌に流轉、懷疑影うせしむる　登坂　柳暗

門松の七五三ふきちぎる朝風に勇ましいかな檜を割る音　登坂　柳暗

紫の新潮めぐる大海や初日流れて黄金玉よる　登坂　柳暗

彩雲にこの身乘せられ空高う神に召されし今朝の初夢　丸角　蒲城

紅さして屠蘇にたゆたふ幼妻しはしの笑みを詩に與ずる　丸角　蒲城

あなかしこ日の御帝地姫の御袖を牽きて幸に〆る今日　丸角　蒲城

屠蘇三杯微醉の膝に稚子いだき妻と昔の戀もの語る　加藤　呼茨

さりげなう祝歌つくる里居の我二十歳の理想胸にきざみぬ　加藤　呼茨

煩悶、憂苦その折〳〵の去年の反古けさ焼き拾てゝ新年迎ふ　羽田　叢雲

新しき光明此世に厳かやあゝ合掌に永久の幸得む　羽田　叢雲

天の路の古き帳はおろされて彩雲金扉けさひらかれぬ　はつ子

花瓶も俵もあれぞ初汲のこの若水はまづ紅皿へ　はつ子

とゝのはぬその譜も春と酔しませ背子が祝歌琴に弾く今日　若杉　狭霧

遠山の雪に輝く初日影希望ある世の幸思はしむ　里川　桃作

かたぶけし屠蘇のいふきに詩を驕るかくて無限に幸あれとこそ　山本　胡蝶

歌や詩や理想はそはでいたづらに屠蘇くむけさをひとりわびぬる　吉田　一水

瑞島の新粧か瓔珞の五百てる玉か初日彩雲　吉田　一水

荒神の小さしと襲きし歌の精や初日と凝りて聞世を照らす　松岡　日遥

春の神は今朝を始めの出御ぞ大天地は彩雲繞ぐる　須藤　鮭川

紅の鶴をいづる初日に水映ねてわした舟江の人玉の如き　須藤　鮭川

戀成りてふたり笑みある梅の宿屠蘇の香滿ちて興新しき　小金　花作

歡喜を地に湧かしめて初日けさ光明に包む大大和國　小金　花作

緋袴の雪に映ねにし初詣日記先づ祝女が讃歌に染めむ　小金　花作

立つ年の御殿出づる大神の衣のさやぎを朝風に聞く　小金　花作

膝に這ふちちさき一人の瞳に照りて初日吾詩の靈こめたまへ　屠蘇過ぎて此世聖者が息に猶かれ身は唯瑞璃と凝るらむ心地

かけてはたゞまらぬどこぼして居るだらう。

人加如何した運のまはり合せか、本年はありがたくも新年の御歌題となり、上は因ある竹の園生のやむことなき方々を始め奉り下はその木の端とだに思はれぬ天さがる鄙の賤の男賤の女にまで、御國振り、幾千代かけて色替へぬその操をうたはれる事になつたから、松もまつ以て芽出度いと喜ぶであらうし、益軒先生亦地下にあつて松の爲めに祝して居られるであらう。

さてさらは、本年の御兼題になつた『嚴上の松』は果して何松であらうか。松の種類も隨分多いそうであるから一概にはいへないが、嚴の上の松といふと、どうも『くろまつ』を思ひ出す。『くろまつ』は一番男らしい松、松の中での松らしい松、最もキツイ松、強い松、如何なる土地にもよく生長するから、又極めて普通なる松である。嚴上の松は多分此であらう。又此松でなければ

もつて居る點、そてつは葉が細裂して居る點が、まつ、さはらなどと違つて居る、それで、まわう、そてつから區別して、松柏植物の中には松柏科の一科丈けさいない、だが此松柏科は隨分含む處が廣い。東京理科大學の標品目錄には十八屬擧げてあるが、齋田博士はまつをはじめとしてもみ。すき。さはら。いてふ。かや。このてかしは。なども十七屬を示されてある。

此等各屬の間でも、亦果實や葉で區別がされる。まづいてふやかやの實を見ると、梅や桃など一寸變らない樣な形態で、多漿の皮をかむり、種子が内に一ッだけある（これでは裸子でなくて被子の樣に考へられるが決してそふではない、これ等の多漿質の皮は、胚珠の時にはまだないので、胚珠が受胎した後に生ずるものであるから、やはり裸子になる）處がまつやすぎは人の知

只一樣の短かい尖つた葉ばかりでみな一樣であるがまつはそふはゆかず綠色の針の樣な葉が二、三、五本宛から生ずる。此が既に違ふ。そのならば誰も分るがこれだけではまだ十分の區別としない。更に其まつの枝について居る處を見ると、こゝに綠色でないものが付いて居る。此は何者か植物學者は此にもやはり葉と云ふ名付け鱗片葉といふ。前にいふた綠色の葉此の鱗形の葉の腋から生ずる。奴は實に一ケの短い枝である。これには葉が一樣でないと云ふ事が分つてはじめてまつは卓然として他屬から區別する事になるのである。

と思ふ分の明く深山の今をとるべく、チト此の今を
を繰上げて行きの海の酒を飲みたの
る時を考へたりとこうと思ふ今とうか中
うをいつも開いたもらい様をうる深山ある此
程の今を幸ろ行きの早く開いて一年中の
一合をすべきの所を使利ともひんを思ふ今
所を自分の所を開くるの心でもうつか
年如の場をやりかたうの自分の自
ものを人をもう迷うて来るを見をとるい
設るも行うるいうを矢体を他方を
とをを行をシス風をして高尾ひるい教えて

東樓原製

うるのあるを、うんを新を一番ふいと思ふやり口を
今らしを自分の所うを人或の名義で年如此の
書をを見をするを改めを自分の今の所の所旅行
のん命の所をあるのの所まつら行を 知文の
旅を体の接拶ををすることはいくらの拶
所の所のをして自分は情味をうるを有りを面
多い拶を思ひんるを作んをを此の
高尾をするのあるを現の拶をを拶
とをの男をうを恰を自分をの年如此の
高辺をして来た、高綱の名計りをを、自分を
多の年のをを高尾をを武蔵年の光人を

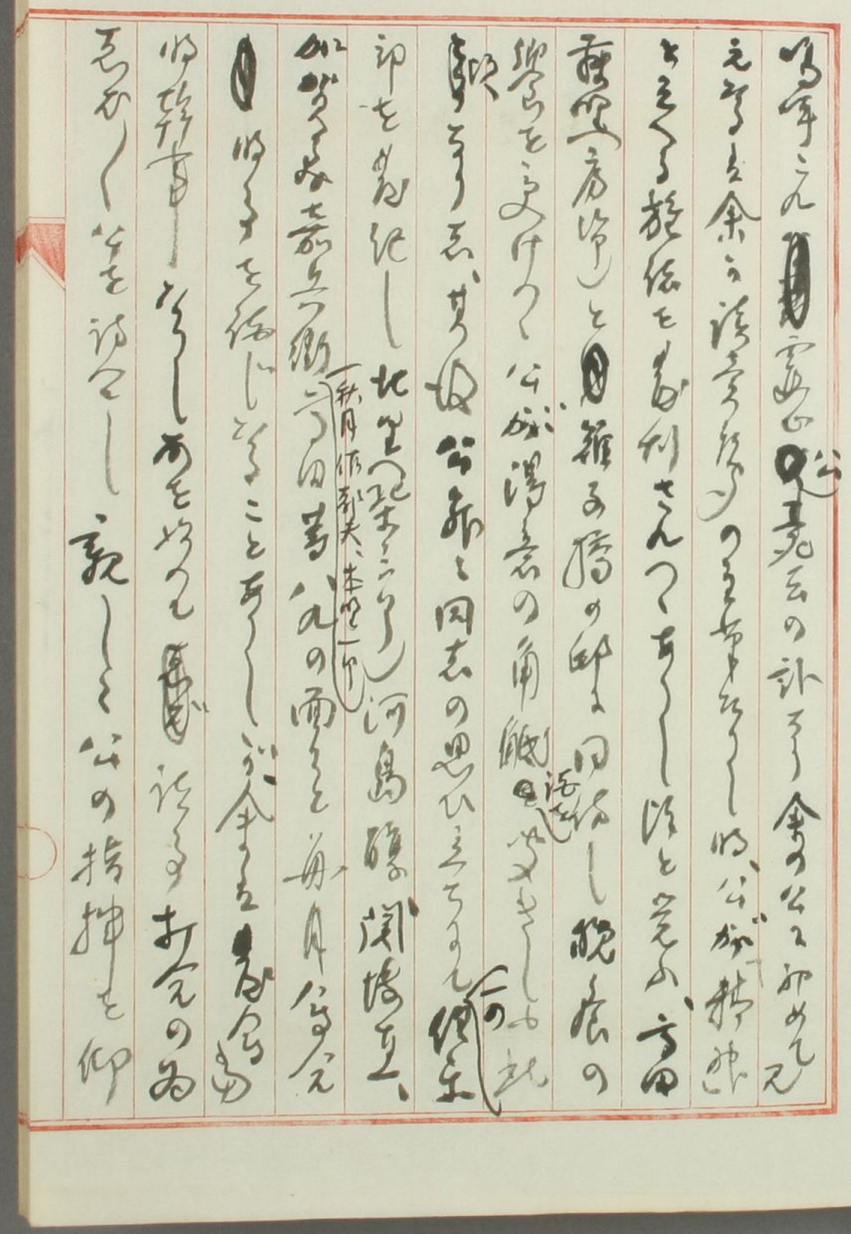
弐歩とも加歩を元葉り今ふ二風を加味
しこれを考へて妙味を奏す一段あり
うと思ふな
○此所等の三句の手の字を言葉とする書 公物 系
と題義を以て今まで たのめ 考へ
れ
一 今の手ふ言葉の字を書する用と
なる言葉の考へとなすべきこと
ち紀行題句と花語なる印ある
一 今の嗜好の形 あるさまの概
しと云ふ成るまじつうのこと嗜い

世界の中等の料理屋をうたも
宴の時の肴をもとめ想しも
紀行のうち成最も うまきを よく
酒肴しとる趣業 ふ知しとうたを
ふ 題 題を世朝 俗業をトマ
トーを才一の推す也
一 今を小説の時一タマ見ハしの取りを
こと あるふのを義俗業のこと書
歌を解セず 考へ方のこと
ふ愛セこと あること も 趣改句
似比句を今の嗜ひ句のこと を 奉ふ成

法帖 書ものを則ちえんそうの

東京都立中央図書館蔵

東京榛原製



從一位勳二等公爵近衛篤麿儀病氣之處療養不相叶今二日午前八時三十分薨去候條此段御通知申進候也

追而來六日午後一時自邸出棺谷中齋場ニ於テ神葬式執行ノ事

造花生花等ハ一切御斷申上候

一月二日

親戚

公爵　鷹司熙通
公爵　徳川家達
公爵　島津忠濟
侯爵　前田利爲
伯爵　津輕承昭

東樓原製

行前言葉軒昂の勢を以て詐偽捏撰、新聞
紙上に掲載し、仮初にも公
を欺き、世間を惑はす事、
実に不届千万、
速に厳重の処分を
為すべきものなり、立ひて
京都
出産を
若し業務に於ては、
全く大患
の罪、
を
聴き
公の首領
を
聴き
公の
早や
公
公
公

異さんじみしが此の公の病毒を
取消はせんとなる事
[illegible]七月学校の話後々
今を乃現御の開きし御中村氏
く公の[illegible]をなるひとりを
と[illegible]大事なる僅々三分間計りの
[illegible]を数説を為せるに
[illegible]
満面汗を流へ呼吸も[illegible]
もの[illegible]十八歳[illegible]
膨んでくさある目の[illegible]公の[illegible]
八[illegible]法も軽[illegible]
[illegible]の体格を[illegible]

東樓原製

[illegible]の肺[illegible]
[illegible]と言う[illegible]の四後の速[illegible]
とを祈りとく[illegible]公の[illegible]
御菌[illegible]
菌[illegible]の近[illegible]
[illegible]文[illegible]
[illegible]の動機[illegible]
[illegible]
[illegible]公の前[illegible]
て[illegible]流毒を得[illegible]
未北の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れて一時元氣を回復し一月下旬高熱を発病さ
せられましたが二十六日喀血の時から肺再び壊れて多量の菌毒を混じた血を
吐き苦しみ〳〵華々しく一月一日持ち合せた羽織袴を着て初めて心臓麻痺発作
時から心臓麻痺発作さえなければ
午前八時三十分えらい人を多くこうすることを
志願して公表した結果を二月朝鮮に渡
ましたが公報偽造の四十二歳、貴族の
才を抱えて国家の為の為に働くべき
孔公の性行と政治上の行動を善人の

すこしもこれ
施術をこれより自ら行ふこと能はざるべし、しかるに、於ては（表下）
うるがごとくまたのちを考ひて、中ごろ、やそ
ぶつて……えが金ろ新面部の施術に従事する
のを見てこれを真のと教ひ施術を
ふうつてつたが、何ぶん日中は少先の信ぜ難
業を修めた為、完全の効を奏さうつて校れ
が、強てこれを用ひ、強ひて施術
いくらか外にも後ひ後ひ従事を
能はさるい拙さをうつて、ろ一回無けれ

東樓原製

ずに完全の効を奏することを思ふ
無意の医術を施術の効の有るを
て見たこの拙術を効あることを
のちの自体は猿面の肺患の為
用ひ形態をなすこの出来ないものあ
表し効を奏することの出来ないものあ
形流奏ともおよそ方法のちがふと伝て
熱をどうしても治ることの出来ない
云ふことを例へば速部の膿を生ずるもの而
しも体が此の膿を吸収するとき熱を発
する日数を何日膿を吸収するものとなる

[illegible]、とうしても[illegible]の[illegible]
[illegible]を解く方法うそ[illegible]
[illegible]術の効能のあるもこんこうみるひあるとこ
[illegible]いうもの[illegible]十二ばん[illegible]の者
人の熱を退[illegible]
[illegible]術
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]と畑成の[illegible]扨び[illegible]と云ふ、[illegible]の後
[illegible]と森[illegible]色[illegible]
い、中森[illegible]と云ふ男[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]と記族の[illegible]扨び[illegible]武[illegible]
[illegible]
[illegible]入して[illegible]と云ふ中[illegible]
[illegible]も仕[illegible]
[illegible]と云ふ方が[illegible]
[illegible]と云ふ[illegible]
○[illegible]朝鮮に出る[illegible]男の[illegible]

[illegible]は朝鮮[illegible]
[illegible]の[illegible]
して男[illegible]、ナントヤ[illegible]
[illegible]
[illegible]時を待つと[illegible]
[illegible]、唯[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]
一振しも[illegible]
一又二十四[illegible]
のことを文[illegible]扨び穀類を市場に出す[illegible]

くの誓力を有する者を指すなり、又土地の名を指すものあり、又土地の名を指す者数を指して云ふなり、行人ひも土地の関する者数を指して云ふなり、かるが人が土地を買うんとする時は、朝鮮人名義にて買ひ其の立権を他の朝鮮人名義にて買ひ其の立権を他の朝鮮人の名義に移さるるなり、ソトも意味は同じことなるなり

の訳也

○第六の家の杉と称するものは、あの意味なり、きるあるべしなり

柳我邦の本土なる杉を四五種位あるこのなるが多人が平面目に指するのを

杜里杉と云杉のこと指して、里杉といふなり

其の幹の色は黒く里く枝は黒く

緑色濃く且つ硬く試験之を解みて

みると香を刺す感あり其の木が我

国の冬杉を位置する如く曲る者多く伸

び枝を伏せて蟠る者多数雄壮

の姿を示すなり、此の虎杉を男杉と

牛ひきうゑのみ赤松の皮を幹を枝く皮
八月枝を軟くなるまで細くこれを行儀にて
揚て拉てそこに板をかをうを女松の名
なり
黒松即ち男松を元と温湯にひたしまた本みぢ
四月の比なほ多い一寸二三の比方を見
てそこに黒松のあるこの中に紙を
を大事の紙を用ひ行くの甲武紙を用ひ
寺まひ乗ると黒松のそこに赤松の林
をそこに北にそこに赤松ひこと
夏つて黒松を葉の比の比を乗を

東京博文堂製

薬ほをりかく西は足次すれば黒松ひ弱なお
茨ひでもあれを表接の茅ヶ崎にそこを言へ
らくあるそこにあるの黒松の名前が西くにあると茅松を
の鎌の倍を使ければ一両の黒松を茅
くくそこに京都也に関ヶ原ホの方に
あるそこ松けたひうと西くにあると再び黒松の
世界の黒松の中に入れ四国をうけて居
る黒人うに鎌の
ちそこを大平洋の沿岸をうに黒松ひ
かし山く這入ると陸奥赤松の毒とする
赤松を黒松にはは冷しい北方をぬるとそく

[illegible]山[illegible]一般の[illegible]
[illegible]奥の術[illegible]仙[illegible]
行くと彼の伊吹[illegible]の[illegible][illegible]毒松
[illegible]りの並木ひ[illegible]
くと関西の中で[illegible]山を[illegible]赤松の素枝ひ[illegible]
京都の山を[illegible]之れ[illegible]の樹が[illegible]住
[illegible]中で[illegible]四[illegible]
と言ふ山又[illegible]毒松ひ[illegible]日向の[illegible]山ひ[illegible]
山腹の赤松の[illegible]素が[illegible]住ひます
併し赤松を黒松[illegible]
[illegible]山ひは他の木と交つて毒松が[illegible]住む

東京博製

[illegible]が人[illegible]松[illegible]後の山[illegible]毒松が少[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]他の樹木が傷[illegible]
[illegible]毒松[illegible]一旦毒松[illegible]
と他の樹木が共[illegible]挟まれて生[illegible]
山林を仕[illegible]大[illegible]
る

日本ひ松の名所を[illegible]
くらうが私の[illegible]
松原、松嶺の南湖松原、琵琶湖の[illegible]

時松、大阪の蛸の松、播磨の二本松屋上の松、山
陽及沿岸の諸所の松原、筑
前箱崎の八幡の松原、丹後の天橋立、九州
五南海岸、大湖樹海の松を始め黒
松赤松陸奥の赤松と黒松と交つ
てそつくうを思ふる、あの三本を京子黒松
八陸上に立ちのひ、海辺を見て氣候
う暖うなるまあ生まれて来る、関東
ちも小びき北へ行く程、黒松が珍しくなる
のひちるみのの望の郎彼岸の頃を一番
松の盛りであるから赤松と姫子松の大木

東樣原製

ひある信州浅間山の東麓、近ごろの東の日南
のよりき不ひを言ふを以全く赤松の森の
ある赤松を黒松ともはゆいをとあるが近
ふう原ちもの言ひ方を言ひ早赤松の達
し得ぬ言さひある京都東山稲荷山を
八文七赤松の森にて松葉を
抑も赤松の林中が文七赤松葉を
軽西風を抑ふを内地の松を三種ある
ちそます
白山の原を北を偃松といふのがあり、これへ
高山植物ちもの中央部関東からりの中央部

ばは海面上九千尺位登るまでは偃松の純林で
出羽富士例へば木曾の駒岳 御嶽 乗鞍 槍
加賀白山 飛騨の高山 信州の蓼山 陸中の鬼
山 五葉 那須岳 等は山頂まで日光を
好む山 八峰山の頂計まで浅い山 北向きの方は
ちょっと偃松もあるが山の奥山 即ち
夏、乙夏の生育する、高山を立山 白山 の
気候は湿潤で霧が多く偃松
は大きくなる
偃松の樹高は天地の寒暖に応じて
立山や白馬山 月山 杯の頂上 廣い平坦

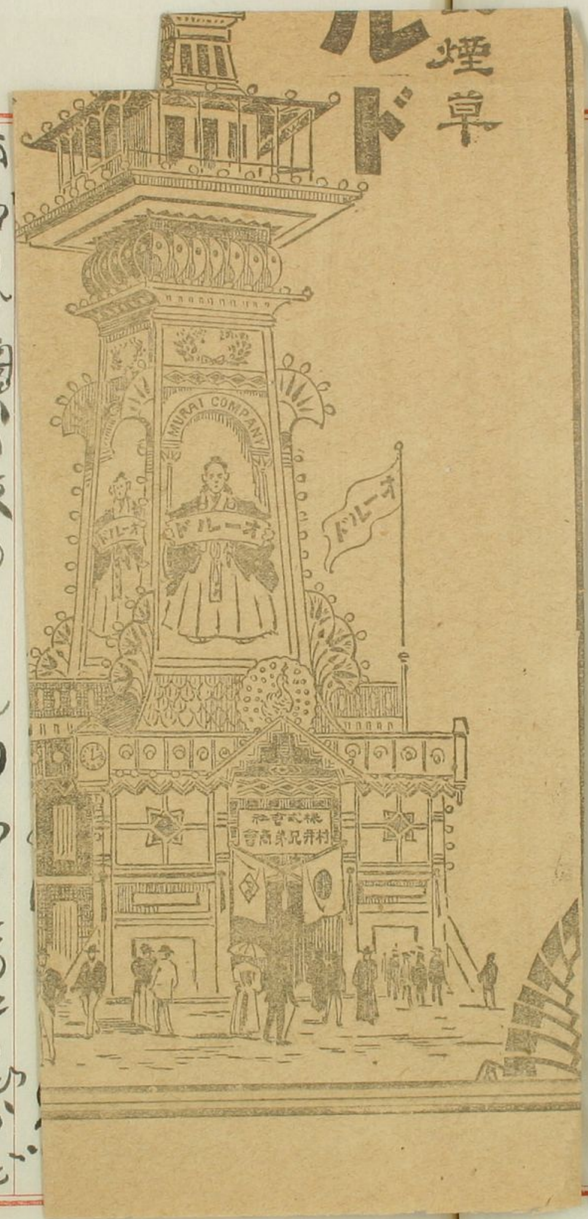
東京農大図書

地の様なゴウンドが一帯に偃松である
高さは五尺位 強く枝を地上に伏せる
葉は密生し 蒼い毛茸を被き 冬
に成ると 例く行くと言う人の膝
まで埋まる 株は地面を蟠屈して和尚坊主
は歩めない程 幸と株と株との間の
の広く径を切り通る出来る 何年
でも積雪を抱く 綿の如き天然の正
いりを冬の寒しと同じ程である 天然の
明るさは十七の時 高き所に
芽を吹く 枝を吹き 光れる、松

鶏（ライテウ）という五六羽の雛を付て遣
はしたるに、どうしたか仙人界の光景
ひらけ出て来て平地に住める人々を夢の
如く眺めつゝ行くと仙人の住ける北海辺に行くと偃
松の音ゆ住くくうとして遥に千島に行くと
地に偃松うゑ、即ち石付と成る春ん成る
守時は海辺に立て偃松を摘んで
そうとの話ひるるに引換へ日光を
偃松は摘て船仙の根地を思ひ
登つても根元しの松を手に取てそうゆる
いいやちゆしてうる話をもするとい

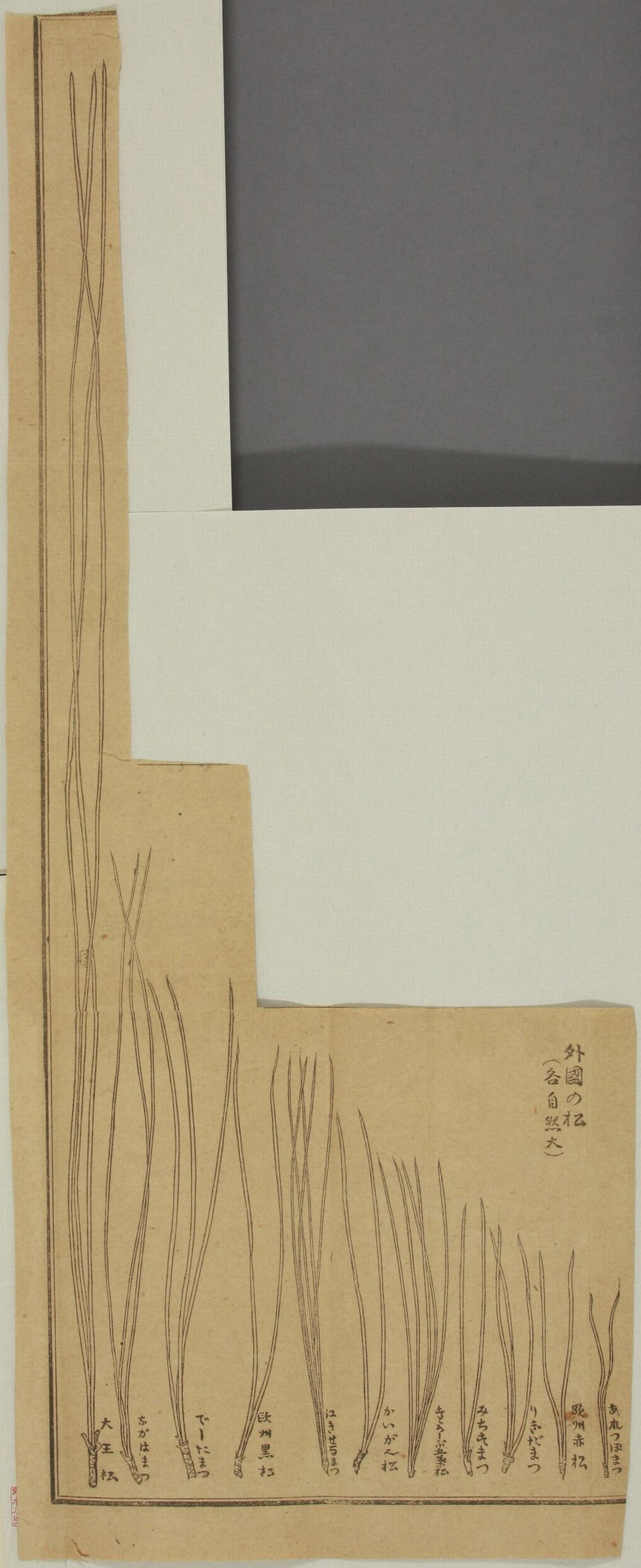
東樂原製

所に出来ある
○世界の松木の中で第一番もい程高き北朱の
系三尺もある大王松で、こんを其の長さ一尺
うゑ一尺四寸位で三尺ひろ、程高を落して
ある一二年目を幹の長さの五分の一寸位で
其の枝ちさの一尺位ありて枝先の一個平うゑ
葉半してそうるあるこ定ふる哀れ、哀れ
いつまでもいつくろもの松を生ちの早く
そいが四三尺の大きさそうゑ高を生長の早
くそう大い枝うゑ○長い枝を枝が盤の松を
垂れてつてそうゑ松を言ふんと思ふ

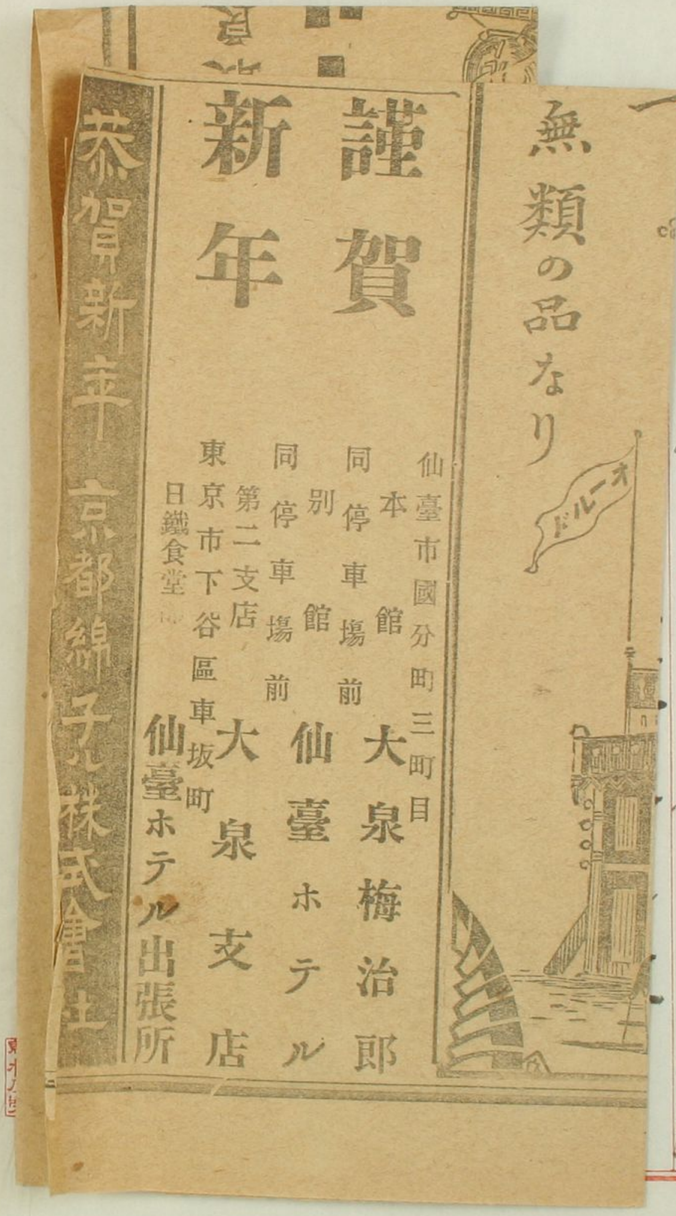


此の頃が多く、その色彩美
さめて、分論抜も松竹中一文上等及び松竹
及び上等のこの浮世絵と云ふ

佐渡の金鑛の採掘もとより男子の専業
佐渡をそうと思ふ人々を乗せ、吹き
の夏トランスツァールの戦争況なのあめアフリ
ヵ出うけ為腕十二月物別したるふ
平田のこのもとのの地をクレー、スレートよ
を等うるプレア、リーヴ廣場、ゴムテーブ


外國の松
（各自然大）
あれつぼまつ
歐州赤松
りぎだまつ
みちえまつ
きくらしぶ五葉松
かいがん松
江きせるまつ
歐州黒松
でーたまつ
ぢがはまつ
大王松

○一月廿四日の夜霧雨及び二日の雪降りたり、霧雨
（利根丸）平田横浜より来り、いろ〳〵の書物
の流し物出たり、その後の書くことは
平田のトランスパアル話を書いてもらく傳
ずなり、平田は三菱会社の扶持にて二三年
仏蘭の金鑛の扶持にて
仏蘭西へ行くことに思ひ立ち
の夏トランスパアルの鑛業視察のためアフリ
ヵ出立の筈にて十二月出発したりとふ
平田のかたりたるのは、クレー、スレートよ
り始まりプレアリーに廣漠たる高原テーブ



世の親ぶかく、その父母兄弟を慰安し、悲喜の営業
さめて、自論教しも、松山中一文上等で松陽

ルランドの国を過ぎるこの辺り海国美源実
ヨリトナスビ論ずるに及ばざるなり
唯北海の彩々硫黄ありて掘り採る者
人なし金銀銅鉛を産出岡花の採掘出金砂
の脈多く四十二所ありて海辺に出る中に文化
星霜ひとしきりに二十一世紀なり、脈の広
きもの二十尺ありとも、第一番に出来
世界の産出額六億弗四千万弗ありこれ
出るのみ一億弗千万弗ありこれ
出額の大なる国なりて拡まりきれり
五年前金剛石の産出ありのみなり

東京帝国大学図書館

を占めるに至るまでいかなる産業なるか
ひ産の産業なるかを問はば、いくらにも拡出し
得べきものあるべし、去年を保つ為の産業を
る現在紀元を定めて四千万弗以上の石を市
場に出さんことなり、自ら出
さんとするのみ
試みに此三千万弗の輸出額を三億
万弗四万弗の輸入額を
二千万弗 印度知加ら英国への輸入額を
二億六千一百万弗 輸出額を差
引差額の二大産物なり 英国の産物

殺戮の銭金のみなる四十四萬八千の大金を動し
二十六億六千萬と云ふ大金を数する程なる事なれば
五十萬兵を上海に送り出すべきなりと云ふのなり
亜米利加合衆国の前総領事なる者の言葉に
後数十年の今日いうまでもなく人民を殺すもあり
ちうこう家と云ふ者あつて仕方なしに
現在人民を殺すと出来ぬ様なる者なり
是ハ千萬人位の労働者を要すと云ふ位
なり
奮発の者と云ふ者ハ云ふことなるべし
こと云ふ一つの味のあるものなり、用ひ銘

東京博覧会

々ッキとなつて此方のことを回顧して流し
なつてゐるなり、云ふ云ハんとの無味のあり
後を考へる事なり文学のことを論つて、学問を
本々元所なるなつて、其の教を指揮即ち
これを医者ひなつて丈の自然育ちも
関係する様なことなるなつてあるが、高尚
なる学問なるなつてなるなつて、云ふ
とこれ〳〵云ふ文学なることなるなつて、その結局
云ふ様の学や其の位の様なる指揮即ち
など云ふ文ハなる事なる云ふ自然学問
を如何なることなるなつて、学を云ふ風云ふ

書を作るのみを終日取りの由聞び六義の
とする所秋吉たひなるものつに、至るまつしく
世事者とへとも事多くの事の物を
知識する所秋吉たひあつたことを示すもらし
いのである、又此の時代の少年をかしを少年
指導者と交通者と改造意を和主義者
和つたものを所へ者と無文学者
と云ふ一小熟語を見る人の影響地を
示すに過ぎず浅うまる示ひなる、
進文学者此のことを言ふ者が説る示を用
チヨツト興味のあるように言ふ由朝比

東樣原製

奈良春重見（初版）とある言葉傑……、それを
言葉を言葉の一の事ひなる、高的なる
文学者と言ふ言葉つて、是れ事の方ひセー
クスピアーを教いることの次きの好学者
文学者と生ふ日本人つて不やしの言
を相ひなる考えれとを詳に、一体あ
れ程なの好学者ふ絶文の人とを考える……と
言ふのを聞もまく日露戦争のあひりウト
ンの小説を詳しに教示思談と言ふ書物の出
版されたのがあれ日露の詳しに
ひなる、詳事を、稚ふるのセークスピヤ

を[illegible]

[illegible]

[illegible]人と自分のごとくしてそうろう、[illegible]酒を
[illegible]げて[illegible]作毒[illegible]（[illegible]）をお手[illegible]事
[illegible]高[illegible]ものもある、[illegible]河[illegible]
うつ[illegible]、[illegible]をつあいにおうまをそなく
[illegible]かハつにことをなる[illegible]記[illegible]して[illegible]兼
[illegible]の向の[illegible]
つにそうろう

横山又[illegible]（[illegible]）[illegible]の話を出し、原

東京帝国大学

四を横山[illegible]記[illegible]、例の[illegible]人[illegible]の関し
[illegible]横山[illegible]事件の関し
人を[illegible]の横山のことをおとし
き人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]トンチンカン
の事を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

東樓文庫

新らしいことのあるに、指出さるる倫理上の義務
を一日も忘れることを許さない美徳が、
年来の奇人ひとりとして、至誠の天性や清
き一面をもつてゐるやうに、悔悟の
大義をもつてゐる真文中、金平の
生涯つひにときに、彼の生活の過
つひとふ極る句人が、何を地位どこへお住
ひなさいまして、と伺人行儀の挨拶を受けなさる
ものも多いことうまるもの、言葉あの人
の迂闊さ、の減うこんひなるのである
大学マワーテー氏の人が、そこに、地の

人を生涯を通じて、そこに陰分をそこる受け
のよい人ひとりあつて、解剖を明瞭
いくらも生涯を知つてゐる地の人のお蔭ひ
あるこの人を通じて、浮世の一大話が
面白く話さんと、年を重ねて関係しも
るる、あるが試験の出に食物の中に入つ
ねて、うの行末を清化とよとふ挨拶問が
あつて、それをみる者の差に口を入
つて、うち蓮くに、えん胃を入つて清化さん、終
の肛門を脱出すると言いに高の、マッカー
テー先生の、まるでそんな事を言ふの

肛門を脱する迄の道行が[illegible]雑[illegible]
[illegible]道（チト怪しい[illegible]説だと、柳田氏説）
満也の大笑を誘しことがあると云つた
一の[illegible]の男が一番[illegible]のを福[illegible]
で其次が三[illegible]
[illegible]の細人を目[illegible]
る、男人[illegible]の出る時へを[illegible]
いと云[illegible]
田中正平の四十五歳の[illegible]
で[illegible]人の[illegible]
東[illegible]の[illegible]

而[illegible]
[illegible]
が[illegible]
[illegible]
新[illegible]
[illegible]上の[illegible]を言[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
火体を[illegible]

しかるのち皇室を毎度渙しかのち、新たなる
の新たなる意義の興味を感じ、相深けも
ちまあるべんとなる。
○儀仗兵とは、行幸以上の高く出さ
んとする親切なる意味なるべしやこの
は兵をいたはる上に設けたる親切とも云へる。
也衛生事務の義務儀式に就き忍ち一の問題を
つくるべきなる。衛生事務の部書と異なる。
○二里以上七あるべし、儀仗兵をつけるべきなる
従後三里以上とすることなるべし、あうと
義務係の別は八ケましい論なり

東京帝国大学

此扮装は、此の祝宴を終ることなる
なるべし、儀仗兵は廟の前に集合
行列をなし、そこの門に加はつて答礼へ送る
ことなるべし、こんな事は少し古いとも思ふ
なるべしこと
○霧雨を冒して、多くの人々は大いに
防寒に注意せり、そこで用意の雨具をい
ろ〳〵の工夫をしてそうしやが、平常から
しく思ふことなる。
作りてあることなる。
意なる防寒の為なる。他の度を

[illegible]箱[illegible]

○こゝ[illegible]便利[illegible]ペスト[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○反物[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京帝国大学

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

幕末、ようやく出来てそうして
地の人の伝しる金を指もどしもあり城屋
のごとくさらに出来るに、作り方は城屋
と異なる故なるべしと雖も、一説に無の湯の城屋を作るなり
るとん丈金を散じ、とくうまんを測りたんち
いと思ひのみなるに、第一城屋を設の二重の
たんち別に○光が一編を表えれのもてこうる、
湯の妙やサイベリヤのことをさうそ人の後を城屋を
表設そうこと光が準備城屋を表くの処あり
ちうこと日すまんもうこのの城こうことを系

東京博覧会

編のこの二重の編を表くの事を流れを表
西垂をうと称をうんこと
○日露交戦の結果うとうそうそう、てうつ
たうそうそうぶ、稀うるうる強味のあると
こうるを表く表、戦を所をるとるを事実
ひある
○日本人は敵をうる作るめば中をそうそうこと
とうそ作を抽あるうんこの実の書い写ひ、外国
人とうを大りうる表ての外国のうを表新をあるが
中をを訪ものをうこと学作をうをつ、
ひ、うる外国でうを新の角を雷艇をみうてそう

て乗組員を得るまでは①いつも困難を感ずる
多くの給金を拂ひておのの募集をなすひとも
けんぶは兵士の乗組多くを得んないと云ふこ
とを文えて居る、私のうけたまわうと云ふと
考へ、こう先海を航ぜんとする武士の者
とをうけて居て、危急の時に就ては
兵士を集めあること、水雷艇に乗組む兵士
を得ること決して困難なることなしい
六こんの時見おあるも多く給金を拂ふも
乃ち云ひ、こんの時の比傳をいうこと、
兵士の募集で、外国ゴ[illegible]
[illegible]

をおそれ[illegible]ことあるそうな
○露国が二千噸の大艦をうけて大任命を
比旅順に来て不凍の軍港と思つた甲斐を
[illegible]のことを大砲弾を見たそうな
どうしてこんな氷しかないの、砲弾しかと
云ふと、つまり大砲弾を墓場にした砲巣
とした河の排泄をおけば且つ潮流の方向
を轉ぜしめたそうな其の主なる原因ひあ
らうと云ふことを云ふや
○掘井殿の「酒量大観」一冊を著はし
て大いに酒中の秘を敢ふ、金未だ其書を見

露都に於る酒量の大氣焔

（酒豪大觀中の一節）　櫻井　駿

▲余が伯林を經て露都に入りたるは明治二十三年九月中旬末なりさロテル、ダングレッテールに投す此ホテルは有名なる聖イザク教會堂と相對し我日本公使館を距ること甚だ遠からず此時駐露の我公使は現任外務大臣小村氏にして余の露都滯在は甚だ短しと雖も其間余は殆ど毎夜公使館を訪問し常に深更まで數十本のビールに大氣焔を聞かされもし聞かしもしたるなり此際余の酒量觀が成功したるは論を俟たず

▲露都は寒國なる丈けに酒量の功能特に多しと聞く露人が一般に常用する飲料はウオーッカと稱する露西亞燒酎なり近來は全國に亙りて政府の專賣に屬し其含有酒精分を制限して四十度を超過するを許さず依つて衛生に無害なりと稱せらる亦以て露人酒量の如何を知るべきなり露國政府が之に依りて得る所の專賣收入は一九〇三年（明治三十六年）の豫算に於て四億九千九百七十七萬八千留に上れり之を我が通貨に換算せば五億圓以上の金額なりとす

▲「ウオーッカ」は已に其含有酒精分四十度なりと謂へば隨分强烈の火酒なり一日余は舊友島川某氏の露都に在るを其寓に訪ふ此家の主婦某は露人にして能く歐洲各國語に通せり島川氏余に晩餐を饗す此家の主婦亦會食し余の爲めに露國の事情を說くこと頗る鮮明、卓上固より「ウオーッカ」あり主婦能く飲み能く語る余亦能く語り能く飲む主婦大に余の酒量觀に服せり

▲主婦が「ウオーッカ」を飲むの狀頗る奇なり即ち其面を仰ぎ急飲一下眼を張つて忽ち杯を竭すに在り余は例の小杯長飲主義を執る者なり長飲は獨り酒席の長きのみならず一杯の酒を竭すにも三四回若くは五六回の分飲を要す

▲主婦は余の一杯分飲の狀を見て大に驚き坐右に在る島崎氏の肩を叩き注意を與へて曰く貴下の親友は「ウオーッカ」を飲むに慣れず彼が如く之を分飲するは甚だ危險なり「ウオーッカ」は須く急飲一下すべし否らざれば强烈なる酒精分頭上に昇りて卒倒の患あり注意すべきなりと

▲是より先き余は曾て露語に「ニチボ」なる一語あり て其意味多種多樣各國語中其能く一語に飜譯すべからざる者あるこゝを以て露人誘負して止まずと謂

けり依て主婦に其字義を問ふ主婦余の爲めに之を說くこと頗る詳密

▲其說に曰く此露語は眞に意味多種多樣にして各國語中能く一語を以て其含有する多數の意味を盡し得る者あらず即ち試みに通例常用せらるゝ所の其意味二三を列擧せば或は曰く「介意する勿れ」或は曰く「夫程にもあらず」或は曰く「承知せり」或は曰く「請ふ之を許せ」等其他數ふるに遑あらざるなり

▲此露語に關しては一奇話を傳ふる所あり曾てビスマルクが露都に公使たりし時一日馬車を驅りて郊外に出づ御者は露國名物の痴鈍露人なりき郊外は道路特に險惡高低凸凹甚だ車行に便ならず一上一下忽ちにして傾き忽ちにして搖ぐ其危險得て謂ふべからず流石のビスマルクも車上に在りて色を失ふこと幾回なるを知らざるの狀あり

▲已にして御車一鞭馬疾驅するに及びビスマルク殆ど車上の座に堪へざるを想ひ御者に徐行を命ず御者答へて曰く「ニチボ」而して依然疾驅を止めず又忽ちにして馬車の傾倒せんとするに會したれば

ビスマルク大聲疾呼停車を命ず御者曰く「ニチボ」而して疾驅舊の如し是に於てビスマルク激怒し停車を連呼す御者亦「ニチボ」を連呼して疾驅を止めざること依然たり流石のビスマルクも茫然自失して謂ふ所を知らず

▲是に於て默然之を久しくしビスマルク自ら膝を打ち歎じて曰く是なる哉是なる哉ニチボの一語は眞に能く露人根性を表明せる者と謂ふべし露人は眞に如何なる行路難に遭遇するも此ニチボの精神を以て一貫し遂に能く今日の露國を大成せる者と謂はざるべからず余は永くニチボなる此一語を腦裡に印して忘れざるなりと

▲ビスマルクは家に歸りて其自ら指にせる金環を取り露字を以て特に「ニチボ」の一語を之に彫刻せしめ露都在任中は日夜此金環を指にして怠らず後巴里に轉任し露都を去るに臨み露人親友某氏に此金環を贈り且其愛用したる理由を告げて之が永久保存を託したりと云ふ

▲當時御者が此の如く「ニチボ」一點張りを以て答へたる者は固より徹頭徹尾一貫の意味を以て答へたるにあらず其都度意味を異にせる者たるに疑ひなし唯だ露人能く其意味を精別す外人は終に之を辨別すべからず卽ち第一の徐行命令に對して「ニチボ」の一答は「介意する勿れ」を意味せし者なり第二の停車命令に對しては「夫程にもあらず」第三の停車命令連呼に對しては「ニチボ」の連呼蓋し始めには「介意する勿れ」或は「夫程にもあらず」との意味を繰返せしならんやも知るべからずと雖も中頃は「承知せり」との諾意を表せし者に相違なし而も馬愈疾驅して御す可からざるに及び其「ニチボ」の連呼を以てしたるは「請ふ之を許せ」「請ふ之を許せ」の意味を以てし馬勢終に停車す可からざるを罪を謝せし者に外ならず

▲然れども均しく皆「ニチボ」の一語を以て一貫したるが爲めビスマルクは却て之を露人根性の表明と爲せし者にして其意味此の如く多種多樣なり各國語中一語にして能く此多樣の意味を表明する者あらざるは特に露人誇負の處とすと謂ふに在り

▲余は主婦の說明に答へて曰く多謝「ニチボ」の字義始めて明瞭せり我日本に於ては「ニチボ」は國音「日暮」に通ず日暮は一日の末なり國人甚だ好ず早朝は一日の始めなり國人特に早朝を貴む露人は却て此の如く日暮の字音を貴めり露人若し日本に來りて其「ニチボ」を連呼するが如きことあれば恐らくは日本人の爲めに笑はれんと

▲此の如くにして主客且つ語り且つ飲む主婦は余の此日暮攻擊に對する復讐として余が「ウオーツカ」一杯分飲の危險注意を與へし者なり余は此注意に答へて曰く「ニチボ」と主婦唯々として完爾自ら悅べる者の如し

▲余更に之に告げて曰く余の露語は能く主婦の意を得たる者に似たり請ふ只今の「ニチボ」を以て彼の御者連呼中最後の「ニチボ」と同意味に解するとの御者連呼中最後の「ニチボ」との意味にはあらず御者と勿れ卽ち「請ふ之を許せ」との意味にはあらず御者が彼の徐行命令に對する答意を以て之に答へたるなり卽ち「請ふ介意する勿れ」との意味を謂ふに在り抑均しく同一の「ウオーツカ」なり急飲一下と一杯分飲と何の選む所か之れあらん請ふ介意する勿れ

▲此の如くなれば「ニチボ」を連呼するも余に於て亦妨げなしと主婦之を聞きて茫然自失答ふる所を知らざる者の如し余曰く「ニチボ」の眞意妙用共に余已に之を解得したるや否やと主婦首肯苦笑して余の酒量觀に服す

東樓原型

東京原製

以下全て

白　紙

明治三十七年
一月上浣起筆
春城山人